10）脳転移を伴った精巣腫瘍の1例

内藤　雅晃・宮島　憲生
小松原秀一・北村　康男（県立がんセンター新潟病院泌尿器科）
渡辺　学
吉田　誠一（同　脳神経外科）
張　高明・塚田　裕子（同　内科）
斎藤　眞理（同　放射線科）

症例は45才の男性．血痰，頭部痛，嘔吐を主訴とし，平成8年10月8日に当院を受診した．当初，肺癌，小脳転移と診断され，脳圧亢進症状が高度のため直ちに孤立性脳腫瘍摘除と全脳照射を受けた．この治療経過中に行われた検索により，左精巣腫瘍（卵黄嚢腫瘍＋未熟型奇形腫），肺，縦隔，肝，腎，脾，横隔膜下の腫瘤，及び骨盤部，縦隔，鼠径リンパ節転移と診断された．また AFP が非常に高値であったため続いて化学療法（BEP 療法）が4コース施行された．上昇していた AFP も次第に正常化し CR となった．その後大脳に再発が認められたため動注化学療法が施行され，腫瘍の縮小が認められている．今後腫瘍切除を行う予定である．

11）造血幹細胞移植併用高用量化学療法を一般病棟個室で受ける患者の看護支援

佐々木智幸江・江口　浩子
竹内真利子・関　広恵
小林　和子（長岡中央綜合病院看護部）
西山　勉（同　泌尿器科）

【緒言】当院では造血幹細胞移植併用高用量化学療法を一般病棟の個室で行ってきた．患者の治療経過を振り返ると共に，意識調査を行い，今後の看護支援に必要な点を考察した．【患者並びに方法】患者は10名で男9名，女1名，19～63才で平均38才であった．治療は一般病棟個室に大型簡易ベッドアイソレータを搬入し，高用量化学療法翌日，または翌々日から白血球1,000を越えるまでベッドアイソレータ内で管理している．意識調査は8例目の患者より行い，無菌管理解除後に自由に意見，感想を書いてもらう方法をとった．【結果及び考察】専用の無菌病棟とは違い，全身状態不良の時期に，非常に狭い空間での生活を強いられている．意識調査の結果，無菌管理中の患者のプライバシー保持や，日常生活行動に関するストレス，看護婦との関わりの中での問題などが浮かび上がってきた．今後，標準看護計画及び看護手順の整理，検討を加えていきたい．

12）肺癌手術後の第二肺癌に対する治療

森山　寛史・三間　聡
塚田　裕子・横山　晶（県立がんセンター新潟病院内科）
栗田　雄三
滝沢　恒世・小池　輝明
寺島　雅範（同　呼吸器外科）
本間　慶一・根本　啓一（同　病理）

当院で経験された肺癌術後第二肺癌の，治療法と問題点について検討した．肺多発癌の診断は，Martini らの診断基準を基に，組織型が異なること，組織型が同一の場合には第一癌と第二癌診断までの間隔が1年以上であり，分化度からみた亜型レベルでの組織学的相違も含め，総合的に判断した．

1986年～1996年の間に38例の異時性多発肺癌を経験し，これは同時期の肺癌手術例の2.9％に相当した．第一癌と第二癌の間隔は中央値41ケ月であった．第二癌に対する治療法としては，手術が63.2％と最も多く，術式は肺葉切除が37.5％，区域切除が20.8％，部分切除が41.7％であった．予後因子の分析では，対側肺野の腺癌の手術例の予後が良い傾向が見られたが，1期の第二癌手術例の5年生存率は35.2％であった．以上より第二肺癌には第一癌よりさらに厳しい手術適応が必要であり，手術の適応そのものにも慎重に成らざる得ないと考えられた．また，肺癌術後の症例においては，第二癌をより早期に発見すべく，第二発癌を念頭においた経過観察が必要であると考えられた．

13）高用量 CHOP 療法後に再発し，EPOCH 療法が奏功した非ホジキンリンパ腫の1例

石黒　卓朗・渡辺　太志（県立がんセンター新潟病院内科）
張　高明

症例は69歳女性．1996年10月発症の非ホジキンリンパ腫（びまん性，大細胞，B細胞型）．臨床病期は ⅣB 期，International Index では high risk 群のため，厚生省 JCOG 9505 Study に登録し，高用量 CHOP（CPM：1,500 mg/m^2 day 1 iv，ADR：70 mg/m^2 day 1 iv，VCR：1.4 mg/m^2 day 1 iv，PSL：100 mg day 1-5 po）を6コース実施した．治療終了時の CT 検査では病変は消失していたが，1カ月後に全身性に再発した．サルベージ療法として EPOCH 療法（VP-16：50 mg/m^2 day 1-4 civ，ADM：10 mg/m^2 day 1-4 civ，VCR：0.4 mg/m^2 day 1-4 civ，CPM：750 mg/m^2 day 6 iv，PSL：60 mg/m^2 day 1-6 po）を実施したところ，奏効した．EPOCH 療法は低用量持続点滴による治療法であり，非血